



住み慣れた場所で最期まで(下)

(文：健康ライター・倉西隆男)

前回は、住み慣れた自宅で暮らし続けることを支える、在宅医療の医師を紹介しました。お年寄りに必要な介護が、自宅は無理でも住み慣れた地域で提供できるならば、と考えた人が居ます。新潟県長岡市にある社会福祉法人・長岡福祉協会「高齢者総合ケアセンターこぶし園」で総合施設長を務めていた小山剛さんは、定員100人という大きな特別養護老人ホームを解体し、30人ほどの小さな規模の特養にして、もともとお年寄りたちが暮らしていた地域へ戻すというユニークな仕事をしたことで、一躍全国にその名を知られることになりました。

「こぶし園」は、市内から遠く離れた郊外の丘陵地に位置し、周囲に住居も商店街もない辺鄙なところに今から約35年前に作られました。そこに市内や市外からも、家族が世話することが難しくなったお年寄りたちが続々と入居してきたのです。まだ若かった小山さんは相談員として働きながら、お年寄りを施設に預けることは本心ではないこと、お年寄りもまた、心から自ら望んで施設に入ってきてはいないという現実を目の当たりにしました。そこで、訪問介護や配食サービスなど施設で提供している食事や介護サービスを施設の外でも提供できるように仕組みを整え、市内各所にサポートセンターと称する複合型施設へ分散していきました。あるときは20人、またあるときは15人という風に・・・。

新しい施設はトイレやキッチンまで付いた個室だったり、玄関のように設えたテラスから外に出られるようにしたりと、入居者がまるで自

宅にいる感覚と変わらないような工夫をしました。家族や友人がいつでも遊びに来ることが可能になりました。複合型施設なのでデイサービスで地域のお年寄りがやってきます。学校を終えた子どもたちが、共有スペースで本を読んだり、友だちと連れ立って遊びにやってきます。子どもたちはそこで自然とお年寄りに触れ合うことができます。夜はカウンターバーで一杯やってる人たちもいます。地域でみんなが支えあう、そんな形ができあがっていきました。

小山さんが挑戦するまで、そんなことをやる人がいなかったので国から認可が下りません。そのため、小山さんは厚生労働省に直接掛け合って、特区を認めてもらいました。こうした取り組みは現在の介護保険制度に生かされています。この、大規模特養の解体を成し遂げたのが一昨年3月。小山さんはそのわずか一年後にすい臓がんのため60歳で亡くなりました。生前、小山さんにインタビューした際、こんなことを話していました。「私はこうしたい、どうされたいって言ったらそれで済むんです。“おら、施設になんか入る気ない”とかね(笑)。(みんながそれぞれ)一人称でモノを考えていけば、社会って変わると思うんです」。

あなたは最期までどこで暮らし続けたいですか？そんな問いかけを小山さんは残していきました。



(写真左) 東日本大震災で被災者支援に被災地を訪れた際の小山剛さん(こぶし園提供)。(写真右) サポートセンターのひとつ(著者撮影)